円盤と宇宙哲学の研究誌

日本ＧＡＰニューズレター

1965

1月・2月

日本ＧＡＰニューズレター

—１９６５—
1月・2月号目次　　通巻第26号

来たるべき危機を乗り越えるには	Ｃ・Ａ・ハニー	1
質疑応答	Ｇ・アダムスキー	3
生命の科学　5	Ｇ・アダムスキー	21

来たるべき危機を乗り超えるには

C・A・ハニー

この一九六五年は、地球上における現代文明の最後の十年間の始まりといってよいでしょう。現在の状況から判断しますと、これから数ヵ月間におそらく政府による検閲の枠がゆるめられて、一般にたいするUFO情報の公表率が高まるものと思われます。たぶん四月または五月頃にひんぱんにUFO情報が公表されるでしょう。時間は遠慮なく経過しますので、大衆に舞台裏で発生している物事の真相を知らせ、世界の大惨事を未然に防止するための積極的な努力をし始めることが人類にとって必要であることなどを気付かせなければ、この文明を救うために何をやっても手遅れとなるでしょう。

現在、楽観的な見通しをすることはきわめて困難です。地球上の過去の歴史すべてや未来に関する真実の予言類のすべては、人類がこの世界の諸問題の解決に誤った道を選んだことを指摘しているからです。今や人類はただ一つの道を選ばねばならない時に直面しています。人間が誤った道を選ぶならば、その誤りを修正する機会はないでしょう。

目下私が見得る限り、この文明の運命を変える解決法は存在しません。現在発達中の出来事（複数）は、如何なる手段をもってしても回避できないでしょう。一つだけ解決法がありますが、これは世界の大多数の人類がオイソレと受け入れるとは思えません。その解決法とは積極的な産児制限です。また差し迫った危険とは人類の飢餓と疫病による死です。これこそは地球が直面している唯一の確実な事件ですから、他の何よりも先ずその問題を詳細に論じてみようと思います。

将来―たぶん今後五年ないし十年以内に、三度目の世界大戦が発生するでしょう。ひょっとすれば一九七〇年までに始まるかもしれませんが、私自身はもう少し先になるだろうと思っています。この大戦争というのは東と西とのイデオロギーの相違によって起こるのではありません。しばらくそうした相違は存在しないと仮定しましょう。また如何なる種類のトラブルや闘争も存在しないで、すべてが順調にいっているとします。しかしそれでもなおかつ一九七〇年から七五年までのあいだに大戦争が発生する有力な理由があるのです。それは過剰人口が爆発点に達するために起こるのであって、それを抑制するための強力な処置が取られない限り、現代の文明の崩壊をもたらすかもしれません。

この問題の重大さに気付いている人は少数です。今でもインドでは一九六五年中に飢餓で死ぬ人が一千万に達するものと予想されています。現在の人口増加率がこのままで上昇すれば、三十五年後には世界の人口が二倍になります。これは四十億の人口用の食糧しかないこの地球上に六十億の人間が存在することを意味します。当然飢えれば食物を求めて戦争が始まるでしょう。その結果、生きられるのに自滅することになります。このままでゆくならば飢餓は一九七五年までに大戦争を起こすでしょう。

右の結論は、常態にあるといってよい物事のすべてに基づいて出されたものです。しかし、わるいことには自然界も解放されて

人間にたいして暴威を振るっています。一九六〇年から五一年までにさかのぼってこの古びた世界は、それ以前の十年間に発生した竜巻の三倍半に達するその発生回数を記録していますが、これは米国気象局開設以来の記録です。一九〇〇年から一九五〇年までには米国で八回のハリケーンがあったにすぎませんが、一九五一年から六二年にかけて実に二十四回の大ハリケーンが発生しています。また一九〇〇年から一九五〇年までは七回の大洪水と津波が起こっていますが、一九五一年から六二年までに十五回も発生しています。一九〇〇年から一九五〇年までに地球は〝エンサイクロピーディア・アメリカーナ〟（注。米国の有名な百科辞典）の編集陣の注意を引くに足るほどの大地震に十一回ほど見舞われましたが、最新版の同じ辞典は過去十三年間に大地震が四十割も増加したことを記録しています。米政府が数年前に発表した測地学上の報告によると、地球上で年間平均十回の大地震が発生することが予想されるということです。一九五九年の十一月及び十二月の二ヵ月間に十三回にわたる大地震が発生しています。

現在米国には異常な大雨によって起こった大洪水のため、西部には家のない人が数千人もいます。またラジオ放送によると、その大洪水時の気象状況は一千年間に一度しかないほどのものであったということです。とにかく米西部の大洪水はその地方始まって以来の最悪の災害でした。

世界の主要食糧生産地とみなされている各地は、気象状況の大荒れのために急速に減産し始めています。雨の多い地に乾燥期が続いたりして、一般に気象の型が変化しています。一九六五年が過ぎるまでには、今の時代の終りに起こると予言されている一連の出来事の発端にさしかかっていることに人間は充分に気付くようになるでしょう。

以上を要約すれば次のようになります。すべての物事が現状どおりに進めば、食糧不足のため一九七〇年までに戦争が発生するでしょう。加うるにキキン、疫病、カンバツなどがそれに拍車をかけるでしょうから、戦争発生の時期は早められるでしょう。われわれは、あらゆる物事は何らかの神秘的な方法で解決されるだろうと考えて安心していないで、戦争発生は避け得られないものであることを認識し、それにたいする準備をする必要があります。惑星人が地球の諸問題を奇跡的に解決したり地球人を救い出したりすることはないでしょう。そこでわれわれは自分自身についてなし得る物事のすべてや、自分がこの惑星上に生まれた理由などを知ることが最も重要となります。あなたは自己の人格を陶冶し、大変動（複数）が終了した際に他人の指導者となるための指導能力を身につけておく必要があります。

たとえ何かの奇跡によって人口増加の爆発を避けることができたとしても、なお五年ないし十年以内に戦争は起こるでしょう。その場合、敵はソ連ではなく、実はかつての盟友諸国であったことを知って多数の人は驚くでしょう。実際、最後の戦争の発端において米国とソ連が同盟を結ぶのを見ても私なら驚きはしません。また、ソ連が米国に味方して、敵をやっつけた後に今度は米国を料理しようとしても私は驚きません。

あなたが予言に関する何かの書物を入手して各種の意見や信念を読まれることをおすすめします。二、三の宗派が聖書中の予言を取り上げていますが、彼らの解釈にはわれわれのそれとは大き

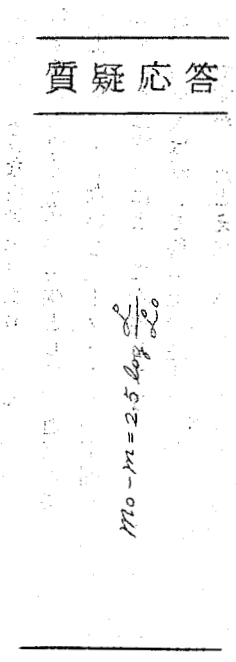
な相違がありますものの、やはりわれわれの注意を引く問題を多く含んでいます。私がこれをすすめる理由は、円盤・惑星人問題の知識を持つあなたは、こうした教会から出される予言よりも全く異なる見解に基づいた予言類が存在することに気付くからです。

聖書中の予言は〝故意に人々に理解させないように述べられたもの〟であり、その正しい意味を解く〝キイ〟を持つ人によってのみ理解されるようにしてありました。そのキイはこの時代の終りになって明らかにされるでしょう。われわれは今その戸口に立っています。このキイは年がたつにつれて解明され、〝来たるべき危機〟の研究はあなたを魅了するでしょう。われわれは長いあいだ待って来た物事の入口の所にいるのです。今やそのドアーを開き始めねばなりません。

具合のわるいことには、ありのままの事実を正しく提供するには多くの傍証や資料を要します。だから今日存在する予言のさまざまの解釈を知ろうとするならば、これから先のわれわれの記事を理解することがあなたを助けることになるのです。

或る宗派は右のあらゆるキイを持っていて、予言に関するきわめてすぐれた記事を発表していますが、最も重要なキイを持っていません。そのキイとは『聖書で天使というのは惑星人であること。イエスは高度に進化した惑星から来た偉大な指導者であること。人間の住む惑星はこの地球以外に無数に存在すること』などの知識です。

質疑応答



G・アダムスキー

問 米連邦検察局はどのようにして砂漠におけるあなたの最初のコンタクトを撮影しましたか。彼らはどうして事件を事前に知っていたのですか。（注。一九五二年十一月二十日、デザート・センターにおけるアダムスキーと金星人との会見を意味する）

答 あのときの証拠写真は連邦検察局が撮ったのではありません。あれは米空軍機が上空から撮影したのです。私は後にそのときの操縦士に会いました。そのフィルムが連邦検察局に渡されたのです。どうして空軍が事前に知っていたのかは私にはよくわかりませんが、とにかく空軍は私が円盤研究を始める以前から円盤問題についてよく知っていたのです。

問 地球人は仲間の人間をその財産、収入、職業などによって評価したり分類したりします。そんな評価の仕方をどのようにして変えたらよいでしょうか。惑星人は各個人の内奥の素質や生命を唯一の指針にしているのではないでしょうか。

答 惑星人は財産や職業などを問題にしていません。地球よりもはるかに短時日で一定の満足すべき生活に充分な物を生み出します。いつか地球人もその段階に達するでしょうが、まだ長年月を要するでしょう。人間の真の価値はテレパシーによって〝見られ

るだけです。

問　金星、火星、土星の如き惑星には、病院、薬局、療養所その他これに類する施設がありますか。

答　そんな物はありません。病気が存在しないからです。惑星人は自分や他人の病気が治せるほどに人間を理解しているからです。

問　そうした惑星には法律家や警官がいますか。

答　政治についてはあとでくわしく述べましょう。われわれの言葉の意味における法律家は存在しません。だから警官がいたところで失業してしまうでしょう。こうした場合でもテレパシーが最重要な道具になるのです。

問　青少年犯罪を彼らはどのように解決していますか。

答　あなたが因果関係を充分に知るならば子孫を犯罪人にさせることはないでしょう。青少年犯罪は、妊娠中の妊婦やその夫などの荒れた気分、出生以来幼児期の家族、友人、社会（政治、マスコミ、学校、教会）の索莫たる雰囲気に起因します。もっとも、現在の非行少年の問題は第二次大戦の直接の結果です。彼らは大戦における戦死者の生まれかわりなのです。（注。アダムスキーの未発表の報告書によれば、戦後の非行少年は第二次大戦で強烈な憎悪、恨みなどの念を持ったまま死んだ人々の生まれかわりであることを惑星人から知らされたという。そのとき、いわゆる霊界は存在しないことも教えられた）

問　かりに或る殺し屋が私を殺そうとする場合、全然抵抗しないで殺されるべきでしょうか。神は罪をおかした本人だけに復しゅうするといわれていますので、殺し屋は結局計りにかけられるのでしょうか。またこのような場合、自尊心や他人にたいする尊敬についてはどうですか。私たちはどれくらいに自分を下げなければなりませんか。

答　因果の法則に従って犯罪人は早晩計りにかけられるでしょう。しかし〝処罰〟は旧約聖書専門の事柄で、新約聖書はこれとは異なる傾向を有していることに注目して下さい。イエスはペテロに「剣を引き抜く者は剣によって滅びるだろう」と言っています。

自尊心や他人にたいする蔑立などというものは本来地球製の概念であって、利己的な感情から生まれたものです。他の惑星では他人を傷つけるよりもむしろ死ぬほうがよいとされています。これはあなたの考えと矛盾していますか？　矛盾してはいないでしょう。

問　他の惑星の都市には、スタイルの点で地球の諸都市と同様にいろいろの型があるのですか。また地球のそれと同じように火事、戦争、地震などで破壊されたことがあるのですか。

問　この近隣の惑星も地球と同じ発達の経路をたどってきたのです。しかし現在は地震しか発生していません。地震や火山の爆発は避け得られないものなのです。火山の爆発は惑星の安全弁の働きをしますので、むしろ必要なのです。他の惑星にはわれわれの使用するような自動車はありません。電磁気を応用した乗物が進行するのを導くための路線として、道路があります。この乗物は地上三フィートないし二十フィートの空間を進行します。都市のスタイルは惑星によって相違します。

問　惑星人は概して科学上の進歩に伴う障害をどのように処理するのですか。たとえば科学技術がそれほどすばらしく発達すれば、次第に身体を動かさなくなり、運動不足のために肥満したり、自

己保存の本能がうすれてきたり、貧富の差がなくなって安楽な生活のために思考しなくなって、文化が低下するのではありませんか。

問　地球人は頭脳の持つ本来の機能のうち、わずか七パーセントしか利用していません。その七パーセントでどれだけの事を達成したか考えてみて下さい。これが倍の十四パーセントに上昇したらどんなにすばらしいことでしょう。一方、惑星人は彼らの頭脳の二十五パーセントを利用していますので、そのためにわれわれとはまるでものの考え方が違うのです。

問　他の惑星には狂人がいますか。

答　いません。狂人というものは或る誤った生活法のために生まれるものなのです。成長してから起こる精神異常はしばしば妊娠の瞬間からすでに始まっている場合があります。しかし外部からの影響による場合もあります。

問　惑星人は文化、芸術、政治、経済、生理学といったものをどのように解釈していますか。芸術にはどんな材料が使用されますか。また芸術で何が表現されますか。またその際に地球で使用するようなフィルム、蓄音器、ラジオ、テレビ、録音機などを用いるのですか。

答　私が見た限りでは、他の惑星にはわれわれが古代風と呼ぶ芸術の様式がまだ存在しています。不調和なデザインは見られません。したがって人為的なデザインではありません。彼らは地球と同じような材料を用いますが、ただそれがきわめて純度の高いものなのです。地球の芸術家で惑星人の芸術家ほどに自己を表現し得る人はいないでしょう。ラジオ、テレビ、蓄音器なども用いますが、地球のものとは異なっています。たとえばテレビはカラーの立体画面です。テレビで何かを見たいと思うときに自宅にいない場合は、その放送を記録させて、あとから見ることができます。セットは〝記憶する脳〟を持っているわけです。

問　他の惑星人は、生長の各段階、すなわち胎児期、幼年期、青年期、成人期、老年期などにどれくらいの年月を要するのですか。各人の寿命は惑星によって異なりますか。また彼らは出生時の命名式、誕生日の祝い、堅信礼、結婚式、金婚式、葬式などを行なうのですか。やるとすればどんなふうに？

答　胎児期は各惑星とも同じです。しかし金星の幼年期は約二年です。そこでは青年期と成人期との区別はありません。老年期もありません。彼らはいつまでも若さを保つのです。金星での年令は地球式に計算して三百才から一千才に及びます。彼らは右の質問にあるような〝祝い事〟を一切やりません。生活それ自体が祝われるべき祭典であるからです。

問　惑星人の服装はどんなものですか。また彼らの家屋はデザインや設備の点でどんなになっていますか。男女の服装について、ロンドンやパリーみたいな流行の中心地がありますか。

答　惑星人はエゴに支配されませんので、流行という気まぐれなものを知りません。流行は人間の物欲から起こる利己主義の現われです。惑星人は季節や仕事に応じた衣服を着ます。余暇には通常インド人の着る衣装によく似た服を着用します。かりにあなたが金星の都市へ行って街路に立てば、衣服に関する限りでは地球のどこかの都市の日常生活とさほど差がないのに気付くでしょう。

問　彼らの家族の構成はどうですか。家庭というもののあり方に

ついて道徳的な見地に立っているのですか。また私生児の問題について彼らはどのような考えを持っていますか。

答　家族の構成は地球と同じです。平均三名ないし四名の子供を持っています。しかし私は十八人の子供を持つ金星人の夫婦を見たことがあります。家族のあり方は道徳的な評価の対象とされてはいません。むしろ逆です！　現実の問題に関する彼らのはるかにすぐれた知識を考えてごらんなさい。それは私生児にもあてはまります。あらゆる子供は等しく祝福されます。子供は、それが生まれ出た環境の如何にかかわらず神の子として認められているからです。惑星人はあらゆる子供を心から愛しますので、子供は如何なる家庭に養子にされても両親と同様の愛情のもとに可愛がられるのです。

問　惑星人は人間の自然死や事故死をどう考えていますか。

答　彼らは生命は永遠であり、どのような死に方をしても、死後数秒間で新しく生まれかわることを知っています。彼らは常に死の心構えができていて、しかも正しく死ぬのが重要であることを知っています。死が近付くと喜んで新しく生まれかわる用意をします。

問　その死体をどんなふうに取り扱いますか。火葬場や墓地などを使用しますか。土葬と火葬について両様の論がありますか。

答　死体の細胞は分解されねばなりませんし、できるだけ早い方がよいことはわれわれが知っているとおりです。土葬の場合は細胞が分解するのに長時間を要します。他の惑星では瞬時に消滅させる或る方法によって死体を分解するのです。つまり高周波振動によって粉々に崩壊させるわけです。すると死体は海中に落下する雨滴のようにチリになります。

問　惑星人は一日に何度食事しますか。また何を食べますか。

答　通常一日に二度食事します。肉体と魂とを維持するのに役立つ物を食べます。

問　死体がチリになった場合、その原子は何かの目的に利用されますか。それとも特殊な目的に使用されますか。

答　海中に落ちる雨滴が海水の一部になるように、分解した肉体の原子もどこかで何かに吸収されます。特別な物に利用されはしません。

問　惑星人はなぜ宇宙旅行を重視するのですか。

答　惑星人は学習に終りがないことを知っています。彼らは生涯を通じて毎日学校へ行っているといってよいでしょう。だれもが教育のために一年に一度宇宙旅行に出かけます。そして絶え間なく活動している創造的な力を見て、結局人間が教えてくれない事柄を学びます。通常彼らは別な太陽系へ行ったりします。宇宙船でどこへ行こうと自由なのですが、地球人が持つような誤った好奇心を持ってはいません。

問　相手を惑星人と見分けるには？

答　あなたがゴム手袋を着けないで、絶縁されていない生きた電線を握れば、電流のショックを感じるでしょう。しかしゴム手袋を着ければ何も感じられません。これと同様に多数の人々は惑星人に会っているのですけれどもそれに気付かないのです。惑星人は見たところ普通の地球人と変わりません。したがって相手の人柄によって見分ける以外に方法はありません。だからあなたが相手を惑星人だと見抜くには、直感力を出させないゴム手袋（障害

物）を捨てなければなりません。その際テレパシーが最有力な手段になります。

問　彼らがこの太陽系の惑星間を航行するのにどれくらいの時間がかかりますか。また彼らはどれくらいの数の惑星を訪問していますか。そのなかにはわれわれの未発見の惑星がありますか。

答　この太陽系には地球を含めて十二個の惑星があります。地球の科学者はこのうち十一個まで発見していますが（注。従来の九個以外の二個は数年前発見されたが未公認になっている）、あとの一個もいずれ発見されるでしょう。惑星人は他の数個の太陽系をも訪れます。宇宙旅行に要する時間は、次の時間から考えてみて下さい。私が金星へ行ったときは十二時間を要しました。また昨年（一九六二年）土星へ行ったときは金星よりも遠距離にかかわらず九時間で到着しました。（注。金星訪問記として未発表の英文手記が編者の手元にある）

問　惑星人は地球人の実生活において如何なる面で直接の援助をしますか。或るオレンジ農園経営者が霜の害を防ぐのを惑星人から援助してもらったとあなたは言っていますが―。

答　私はそんなことを言ったおぼえはありません。あれはジョージ・ヴァン・タセルがでっちあげた作り話で、それが後に私の発言ということになったのです。（注。タセルは米国の心霊的円盤研究家で悪名高い人）惑星人は私の知る限り数度地球人を援助しています。そのうち、重病人を治した例二つをあげましょう。一人のパイロットが全身マヒにかかって、車イスに座ったまま動けない状態にありました。彼は「惑星人に治してもらいたい」と私に懇望しましたので、その旨を惑星人に伝えたところ、それから三ヵ月以内に本人は完全に回復しました。その後また本人は、歩くことも見ることもできない六才になる少女を助けてやってくれと惑星人に頼んだら、六ヵ月後に少女は全くの普通の状態に回復しました。

問　円盤に応用されている推進の原理をわれわれも応用するならば、自動車みたいにだれもが自家用円盤を持って自由に旅行ができるという夢が実現するでしょうか。

答　その推進原理をわれわれが知って応用するならば、乗物の一大革命が起こるでしょう。エネルギーは自由に得られますから、その乗物の価格も安価になるでしょう。

問　金星にはイエスが地球で昇天した後に住んだ家がありますか。またその子孫がいますか。

答　家はありません。ただし普通の考え方で考えてのことです。イエスがまだ金星にいると仮定すれば、イエスという名前によらなくても彼が有している周波数によってその正体がわかるはずです。したがって、あなたがイエスの周波数を知っているとして、彼を発見したとすれば、彼が帰郷後に住んだ最初の家を発見できるでしょう。万人は各自が個人の周波数を持っていて、それはいつまでも本人に付随しているからです。

問　他の惑星を撮影した写真や母船、円盤の内部を写した写真類がありますか。

答　一度だけフィルムが磁気で損傷しないで完全に撮影された例があります。それは一たん惑星人が金星へ持ち帰り、そこで撮影した上で再度地球へ持って来たものです。そのフィルムは加州で現像されて陸軍へ渡されました。普通ならば円盤の磁気でフィル

ムがだめになるのです。

問　円盤や大母船の製作者、製作場所、所有者、製作法、惑星上の公共財産、私有財産などについてお話し下さい。税金は？

答　すでに何度も言いましたようにカネというものが存在しませんので、税金その他の納税義務は一切ありません。あらゆる物は共通財産であって、一種の政府—と言えばそんなもの—によって管理されます。各人は自分に必要な物なら何でも入手できます。

宇宙船その他の〝必要品〟は政府によって製作されますが、政府の所有とは言えません。すべての品物は惑星全体の住民の共通財産です。円盤や母船はあらゆる惑星で製作されますが、特に火星は製作について一種の特許を有しています。そこで他の諸惑星は火星の資源が欠乏するのを防ぐために資材を提供するのです。

問　米国の沈没した原子力潜水艦スレシャー号の乗組員は、宇宙の発達段階において如何なる程度の位置におかれていますか。

答　そうですね。これまでに私が述べた説明に従って次のことが言えます。死後数秒間で各乗組員は新たに生まれかわっています。そのなかには、その死がこの地球上の最後の幕切れとなった人もいて、進化の過程における次の段階（注。別な惑星）に移行するのもあります。右以下の中間の程度にある人は自分が生前に体験した場所へ帰って（注。生まれかわって）そこから再出発しなければなりません。このことは、自分が前生にいた環境において学び得なかった事柄を結局は学び取る必要があることを意味しています。そのなかには、わずか数時間、数週間、数ヵ月だけ生きるのもあるでしょうし、長年月生きる人もあるでしょう。結局はだれも人間的表現が完成されるまでは生きなければなりません。しかる後に別な高度な段階へ移行するのです。

問　他の惑星では結婚という風習がありますか。

答　われわれが知っているような結婚はありません。しかし男女が互いに相手を選ぶとき、それはやはり生活のためということになります。彼らは地球人ほどにしばしば過失をおかしませんので、結婚生活でトラブルを起こすことはありません。夫婦は互いに尊敬し合い、子供は愛されます。

問　彼らは子供を得るために人工受精を行ないますか。

答　もちろん行ないません。そんなことをすれば生まれ出る子供から価値ある何かをうばい取ることになります。妊娠期間中に母親、父親は愛の気分のなかに宇宙の創造主と一体化しています。しかし人工受精ではそれができません。

問　大電波望遠鏡はなぜ恒星へ向けられて、惑星に向けられないのですか。科学界ではすでに大気圏外からコード信号らしきものが来るのが探知されていますが—。

答　大電波望遠鏡は近距離用でなく遠距離用に作られています。強力すぎて近距離に向かないのです。しかしすでに近隣の惑星からコード信号によるメッセージがキャッチされています。だがそれは一般へ全然公開されていません。アリゾナ大学では電波望遠鏡を使用しないで、或る装置によって特殊な周波数の信号を受信しました。私はその録音テープを保存しています。その信号は解読されましたが、現在彼らは大気圏外に返信を試みています。それは一アマチュアが受信したもので、本人が政府へそのことを知らせたのです。政府は本人に優秀な装置を与えましたので、今なおアリゾナ大学で太陽系から来るあらゆる種類のメッセージをキ

ャッチして研究を続けています。このメッセージ類は公開されていませんが、一度海軍がその旨を公表したところ、ワシントンの各装置もメッセージを受信したことがあります。

問　あなたが一九五二年に初めて金星人に会ったときに、彼らは奇妙な文字により円盤の推進原理を説明したと思われる写真のネガをあなたに手渡しているにもかかわらず、今まで推進原理を秘していて洩らそうとしないのは矛盾することになりはしませんか。（ハンス・ペテルセン注。この質問はデンマーク語で発せられた。ところが通訳されないうちにアダムスキーは次のように回答した。デンマーク語を全然知らないのに！）

答　先ずファン・デン・バーグの例をあげましょう。（注。バーグは南アの科学者。アダムスキーの〝金星文字〟を解読して円盤の推進原理を発見し、画期的なエンジンを発明した。その詳細は英国の〝フライイング・ソーサー・レヴュー〟誌に報導されたことがある。彼は「この原理は非常に簡単なので『こんな物をなぜ小学生でも思いつかなかったのだろう』といって科学者は驚くだろう」と述べている。しかしそれ以来バーグはなぜか沈黙を守っている）彼は研究を完成しました。われわれは自由エネルギーを持つことができますが、それは誤った方向に利用されてはなりません。バーグはメキシコへ行って研究を続けることになっています。そしてその利用を誤らないために慎重を期するでしょう。それが乗物に応用される前に当分の間冷蔵庫その他に応用されるかもしれません。バーグはたとえばミシガン大学などにその知識を伝えたりはしないでしょう。同大学はあの金星文字を解読しようとして（注。軍事目的で研究した）失敗しました。

問　しかし軍部にたいして如何に秘密にしていても、自由エネルギーを応用した冷蔵庫を軍が一台入手すれば、その秘密は洩れるではありませんか。

答　洩れはしません。動力部の内部には密閉されたユニットがあって、彼らがそれを開くならば粉々に砕けますので秘密は洩れません。このことは以前にも起こりました。フランク・スカリーが〝空飛ぶ円盤の秘密〟という本を書いたとき、そのことが記してあります。みんなが不時着した円盤の船体をこじあけたとき、内部の装置についてさっぱりわけがわからず、あらゆる物にさわったのです。そしてそのユニットをたたきこわしたところ、爆発して秘密は吹き飛んでしまいました。オハイオ州デイトンのライト基地には、墜落してばらばらになった二十機の円盤が秘蔵してあります。これらの円盤から推進原理の秘密が探り出せそうなものですが、できませんでした。加うるにこの地球上の多くの研究所には惑星人たちがひそかに働いています。彼らは秘密を知っていますが洩らしはしません。その理由は次のとおりです。彼らは推進原理についてのアイデアは与えてくれるのですが、それを開発するのは地球人の仕事だと考えています。それによって地球人は教育の程度が高くなるのです。人は言うかもしれません。「なぜ惑星人は地球人に円盤を与えないのか」と。それは与えることができるのですが、現段階でそんなことをすれば先ず軍事目的に使用されるでしょう。これでは何にもなりません。

問　円盤に用いられるエネルギーについてもっと話して下さい。

答　よろしい。話しましょう。古代の地球人はその秘密を知っていました。ついでながらラジオの鉱石受信機は自由エネルギーで

働く物の一例です。電力は全然供給されないのに空間から音楽や声が聴こえてくるのですから―。これはすばらしい物でした。大発明への手がかりになるかもしれなかったからです。ところが一方真空管を用いることが流行し、屋内線から電力を供給するようになって、大発明への手がかりは消え失せました。だが、ともかくもむかし鉱石受信機を使用していた当時は貧弱ながらも自由エネルギーを利用していたのです。人間がそれをずっと探究し続けていたならば、現在は自由エネルギーを開発しているでしょう。私自身は自分の実験室で自由エネルギーの開発研究をやってきました。私はただそれを続けさえすればよいのであって、いつかは成功するでしょう。どうすればよいかを知っているからです。しかし成功すればどのような事態が発生するかも知っています。あるいは人類の苦しみを増すだけかもしれません。これまで人間は多くの発明をしましたが、その特許は大会社に売られてきました。しかもその特許でもうからなければ、せっかくの発明も日の目を見ることはありません。たとえば、ワイヤレコーダーが一八九〇年に発明されて特許を取りましたが、実に第二次大戦までは応用されませんでした。ニューヨークのベル・ヴュー病院では一九五四年以来一個の機械が使用されています。私はその機械をNBCのグリーン氏と一緒に見たことがあります。そこの病院長が案内して見せてくれたのです。

たとえば腕か足が折れたとします。ご存知のように肉体はすべて分子で構成されていて、それは互いに陰、陽、陰、陽の順に並んでいます。そこでその機械から出る放射線をあてますと、陰、陽の分子が分離して空隙ができます。そこで骨をつないで元の状態にし、別な放射線をあてて接着させるのです。苦痛もなく、血も出ず、切開する必要はありません。この機械を大量生産して売り出せば一個百ドルくらいのものでしょう。そして五年もたてば地球上のあらゆる病気は消滅してしまうでしょう。私がこの機械を持っていれば、十五年は若返るはずです。一週に三度、毎回五分ずつこれを使用すれば、如何なる種類の病気も進行が止まり、一ヵ月で全治します。この治療機は一九五三年に惑星人から地球人に与えられたもので、一九五四年に組立てられました。しかし一般には出まわっていません。大量生産すると世の中の医者が失業するからです。

一ドルでもカネというものが存在するところには必ずトラブルが起こります。「なぜ惑星人は地球人のガンを治療する機械を与えてくれないのか」という質問状を私は多くの方から受け取りました。これは先にも話しましたように、すでに惑星人は前述のような機械を与えてくれたのですけれども、一般には全然出まわらなかったのです。ベル・ヴュー病院で試験的に使用しているだけで、それだけのことです。（注。如何にすばらしい文明の利器でも必ず利害関係がからんで容易に一般化しないの意）

君の万病治療機の作動原理は、高周波の不可視の放射線を応用したもので、それが肉体の分子を分離させ、それによって空隙が生じるのです。

地球人は惑星人から多くの知識を与えられています。たとえば私は海軍の或る将官にきわめて正確な母船の図面を作成してやりました。すると彼らは六フィートもある模型を作りましたが、それは作動しました。しかしそれぎりのことです。実際これを応用

していれば、今頃地球人は大気圏外へ旅行に出ているでしょう。そこで後になって私はその将官になぜ海軍ではホンモノの宇宙船を作らなかったのかと問いただしましたら、燃料会社が妨害をするのでということでした。

さて、惑星人の用いる母船は二重の壁で作られています。二隻の母船を組み合わせたようなものです。外側の壁は放射線として働くマイナスのフォースフィールドを持っていて、それは宇宙ジンの如き物体が船体に突き当るのを防ぎます。あらゆる宇宙ジンはマイナスであって、マイナスはマイナスに反発するからです。内側の壁はプラスになっています。内部の室はニュートラルです。それで乗員は如何なる放射線の影響を受けることもありません。

問 しかしそんな強力なフォースフィールドを生み出すのに必要な大電力をどんなふうにして得るのですか。

答 そうですね。われわれはいわば電気の海の中に住んでいて、それを吸っているのです。いいですか。私がこうしてクシをこするとそこに電気が起こります。しかし電気といっても電燈を点燈させる電気とはちがって静電気です。静電誘導は電気を通しにくい物にも起こって、紙片などを引き寄せますが、電磁気は特定な物を引き寄せるだけです。鉱石受信機の例にもどりましょう。それはどこからも電力の供給はないのにレシーヴァーを振動させます。ここに秘密があるのです。

惑星人も地球人と同様に過失をおかします。彼らはむかしアトランティス人にパワーを生み出すキイを授けたのですが、そのためアトランティス人は自爆してしまいました。地球人も原子力でそれをやるかもしれません。

問 惑星人は占星術を応用しますか。

答 彼らは占星術、その他の占い、降神術などの秘学を一切やりません。神は人間を作ったとき、人間に空気、水、その他万物を支配する力を与えました。そうあるべく人間は生きなければならないのです。ところが一般人はそうではありません。だから占星術の如きものの助けをかりようとするのです。これは人間が弱く、自分自身や創造主にたいして自信を持たないためです。

問 他の惑星にいるときの気分はどうですか。

答 このデンマークにいるのと変わりはありません。どこの惑星に行こうとも同じことです。惑星人のなかには地球人と同様に有色人種もいます。アラバマ州で発生している黒人問題を考えますと、私には人々が狂っているとしか思えません。一般人が排斥している黒人はもともと自分から黒人になろうとして生まれたのではありません。だれかが本人にかわって〝黒人たること〟を選択してやったのです。その〝だれか〟をみなは通常〝神〟と呼んでいます。だから人間の皮膚が黒いからといって神を非難することはできません。あなたが次に生まれかわるときは黒人であるかもしれないのです。オーソン（注。〝空飛ぶ円盤同乗記〟に出てくる金星人）は有色人です。といっても黒人のように黒いのではなく、白人よりはわずかに色があるという程度です。

私は或るとき一人の黒人に「なぜあなたは白人の教会へ出入りしないのか」と聞いたことがあります。すると彼は「白人が私の出入りをこばむので」と言っていました。あなたは教会へ行く白人に次のように尋ねたことがありますか。「あなたは天国へ行ってから何をするつもりか」と。彼らのいわゆる天国は一つしかな

いのに、黒人も天国へ行くということになれば、またケンカになるでしょう。—そうですね。たしかにこの地球上では多くのバカバカしいことをやっています。たとえば、多数の宗派が互いに争っています。神は分裂など望まないのに—。私が数年前に教会へ行きましたら一人の牧師が尋ねました。そして「あなたは教会へ出入りしなければいけません」と言います。そこで「どの教会へ行かねばならないのですか」と聞きますと、牧師たちは一様に「自分たちの教会こそ正しい。他の宗派へ走れば地獄へ落ちる」と力説します。彼らは人間は唯一神の子であると主張しますが、それでもなお互いに非難し合います。そこで一体どの宗派に属すればよいのかと聞いたわけです。惑星人にとっては、こんな宗派争いなど愚かしいことです。彼らは万物全体を単一体とみています。雨は降らなければならないし、季節は移り変わる必要があります。それが生命を保つための神の仕事なのです。

問　惑星人はなぜ地球人よりも長い寿命を保つのですか。

答　彼らは地球人が持っているような悩みを持たないからです。食物の分配は平等です。金銭が存在しませんので、食物が金銭との交換のかたちで考えられることはありません。一方、この地球では歴史を通じて人間の心に恐怖心が植えつけられてきました。人間の髪が白くなるのは絶えず何かを恐れおののいているからです。酒を飲みたいと思えば大酒を飲み、ダンスをしたり歌ったり、その他何をやっても度をすごしがちになりますが、これは〝人間とは活動する想念〟以外の何物でもないからです。想念は何かを生じさせるための原動力になります。人間が思考を停止すれば死んだも同然です。人間が日常生活で起こす想念こそ人間を生かすもとになるのです。立派な想念を持つ人は立派な人間になります。しかるに地球人は〝思考の技術〟を失っていますので、再度それを学ばねばなりません。想念—しかも清新な明るい想念がわれわれを長生きさせる事実を科学者も示しています。

問　円盤の推進力についてもっと説明して下さい。

答　それは電磁気的なものであって、惑星を動かしているのと同じ力です。二つの荷電雲が交わると放電して閃光を発するのが見られます。それは人工的な磁気とは異なるのであって、その力を利用すればよいのです。宇宙空間の磁気と人工的に作られる磁気とのあいだには大きな相違があります。その自然の磁気の利用を知っても、宇宙船内では極を変化させる必要があります。そのために地上に激突しなくてもすむのです。「なぜ惑星人はすべてを詳細に教えてくれないのか」とあなたは言うかもしれませんが、教えない理由は前述のとおりです。

問　円盤は何からチャージされるのですか。

答　それは母船が宇宙空間から集めたエネルギーでチャージされます。母船は巨大なバッテリーの役目をし、それが円盤にチャージしてやるのです。円盤は自らエネルギーを集めることはできませんので、ときどき母船へ帰投する必要があります。

問　宇宙船から出るフォースフィールドは人体にどんな影響を与えますか。

答　フォースフィールドはイオン化された空気です。ですから人間がそのフィールド中に入ればものすごい嵐の中に巻き込まれたようなもので、人体は破壊されます。それは宇宙空間で宇宙ジンが船体に衝突するのを防ぎ、外壁が過熱するのを妨げます。要す

るに惑星を包んでいる大気圏の役目をするのです。

問　宇宙船が地球の大気圏内に入ったときは地球の引力を応用するのですか。

答　ちがいます。それは物体ですから引力の影響を受けますけれども、船体自体のパワーを逆転させることによって引力の影響を断ち切って中立化させることができるのです。だから地上に激突することもないわけです。船体の磁極を逆転させるのは交流を直流に変えるようなものです。

問　惑星人がそれほど長生きするからには数百年間も同じ配偶者と一緒に暮らすのですか。

答　大抵の場合はそうですが、全部がそうとは限りません。しかし離婚した場合も敵対関係は起こらず、親友のままでいるのです。ゆえに地球の離婚とはわけがちがいます。彼らの結婚は地球のそれのように多くの書類や儀式などを必要とせず、男女二人が一緒に暮らそうという約束によって行なわれるにすぎません。ときとして二人のうち一人が相手よりも精神的にきわめて高い進歩をとげることがありますが、その場合は非利己的な理由によって合意の上での離婚が行なわれます。相手はそれをこばもうとはしません。そして再び自分の精神的なレヴェルと同程度の新しい配偶者を得る機会が与えられるのです。

問　どう考えても決して行ったことのない或る場所へ、自分がかつて行ったり、そこを見たりしたことのあるような気がすることがありますが、これは心が空間を旅してそこへ行ったり見たりするためですか。

答　必ずしもそうとは限りません。意識はあらゆる物を知っていますので、それが心に或る事実を伝えることがあるのです。心はそれを受け入れたり拒絶したりします。心がきわめて頑迷で、具体的な証拠を望むならばそれを拒絶しますし、逆に心が知りたいと願っていれば包容的になり、それが事実であることをたしかめようとして、熟考し、推理します。意識そのものは決して死滅することはなく、さまざまの体験を持ちますし、心はそのことを忘れないものなのですが、具体性を帯びていないために心はしばしばそれを拒絶し、夢または幻想と呼んだりします。学校へ行ったり教わったりしたことのないのに、楽器をあざやかに演奏したりする神童についてあなたはどんなふうに考えますか。これは心が意識から過去の体験（注。前生の音楽の体験）を知らされるのです。人間は体験しなかったことを急速に巧みに行なうことはできません。真の自我はかつて体験していて、それを心に伝えようとしているのです。

問　輪廻（りんね）とは何ですか。

答　輪廻とは東洋の哲学者が用いる言葉で、西洋の哲学者は復活と言いますが、どちらも同じ意味です。ちょうど自然界で冬が春に移り変わるのと同じで、人間もこれと同様です。人間は自然界の一部であるからです。腐った水が蒸発して雲となり、再びきれいな水となって落ちるようなものです。科学では物質は不滅だと言います。（注。正確には、質量は不変であるといい、これを質量保存の法則という）これは自然の法則です。そこでたしかに法則として自然のすべてを支配している英知がその輪廻を促進しているのであって、英知こそ永遠に働くものであることをわれわれは認めなければなりません。人間は或る原因を無にすることがで

きないのと同様にその結果をも無にすることはできません。結果は原因から来るからです。

問　戦死した人の霊魂はどうなりますか。

答　現代にはそのよい例があります。戦時中に多数の人が心中に憎悪の念を抱いたまま死にました。その結果はどうでしょう。すでにそれの生まれかわりである多くの青少年が世界中にいます。彼らは戦争について何も記憶していません。たとえば、或る夫婦が寝る前にひどく口論して翌朝目が覚めますと、前夜と同じ感情が残っていて、悲痛さのために互いに朝の仕事—お茶をいれたりコーヒーをわかしたりの仕事—をかいがいしくしないでしょう。人間がそんなふうに憎悪の念を持ったまま死んだ場合、やはりこれと同じことがあてはまります。目覚めたとき（生まれかわったとき）その証拠が歴然と現われます。今日、非行を働く青少年が多くいて、何の罪もない人を無造作に殺したりしますが、これは憎悪の念を持ったまま戦死した人の心の産物です。憎悪を持って死に、憎悪を持って生まれかわるのです。

問　地震などで多数の人が同時に死ぬ場合、それらは同時に生まれかわるのですか。

答　そうです。ただし必ずしもみな同じ場所に生まれかわるとは限りません。たとえば一万人の人が死ぬとしますと、あるいはその半数は別な惑星で生まれかわるほどに進歩しているかもしれません。これはすべて或る一定の法則に従うからなのですが、その法則は人間が作ったものではなく、創造主の作ったものです。

問　あなたがこれまでに行ったことのある惑星はどこですか。

答　金星と土星です。そう昔のことではありません。

問　現在地球上にはどれくらいの数の惑星人が働いていますか。

答　数年前には約一万人いましたが、現在の人数は知りません。

問　その惑星人たちはどんな仕事をしていますか。

答　なかには各国でリポーターとして働いているのがいて、世界中のUFO問題に関する世論や、新聞、テレビなどの反響、各国の円盤研究団体の動向などを米国内にある彼らの〝本部〟へ報告しています。また、なかには政治上の要職についていて、右の〝本部〟へ報告したり政府へアドヴァイズしたりしています。しかし大半の惑星人は各国の工場や研究所にいて科学者を援助しているのですが、周囲の人はそのことに気付いてはいません。とにかく惑星人のだれもが重要な仕事に懸命になっていますので、そのため少数の地球人の好奇心を満足させるようなサーカスを演じる（注。奇跡を行なう）ひまはないのです。

問　惑星人はどんな方法で身分証明書を入手するのですか。

答　一つの方法は先ず簡単な仕事につくのです。たとえば私はかつてレストラントに関係していましたが、それと知らずに惑星人を雇っていました。彼らは先ずその職場を会合場所にし、次に経営者から推せん状や身許引受書などをもらっていました。そこで経営者は彼らのために銀行当座勘定を設け、できれば小切手払いとします。すると彼らは各種クラブの会員になったり運転免許証を取ったりし、こんなふうにして次第に身分証明の書類を入手するのです。短期間の滞在ならこれで充分にやってゆけます。

問　テレパシーを習得するにはどうすればよいでしょうか。

答　私の著書〝テレパシー〟をよく読み、あなたのグループで研究したり討論したりして、テレパシーが何であるか、どうして働

くのかを理解するように努力しなさい。そしてあなたの鈍い感覚を訓練して鋭敏になるようテレパシーを実際に練習することです。

問　円盤研究団体または個人で惑星人とコンタクトすることが今後もありますか。

答　必要とあらばコンタクトが発生します。その場合は衝動によって一定の時刻に一定の場所へ行きたくなるでしょう。そこで実際に会見をするのです。頭の中で何かの声が聴こえたり、何らかの手段を通じてメッセージを入手するのではありません。コンタクティーと称する人のなかには霊媒、文字板などを通じて惑星人の声を聴いたという人がありますが、みな真実ではありません。

問　あなたの知識によれば、過去の円盤の歴史はどれくらい以前にさかのぼりますか。

答　インドには円盤に関する一万五千年前の記録があります。インドの或る大学のグループはミトウ博士の指導のもとにこの古記録を研究していて、私の体験のような現代のコンタクト事件のすべてと比較研究し、毎年十一月二十日を私がデザートセンターで初めて金星人と会見した記念日にして祝典を催しています。（注。インドの故マイトラ博士がもとこの指導者であって、詳細を編者宛に知らせてきたことがある）円盤は歴史的事実として筋が通っているのに、なおかつ多数の学者は円盤の存在を否定します。

問　科学実験として米国が高空へ打ち上げた無数の銅の針金はどうなりましたか。

答　一年前に米国はその最初の実験をやりましたが、みなくなってしまい、行方がわからなくなりました。今度またその実験をやりましたけれども、私は詳細を聞いていません。しかしたいしたことではないので、惑星人にたいしては全然トラブルのタネにはなりません。惑星人の宇宙船のフォースフィールドはこんな微小物質をはね返すからです。グレン中佐の宇宙旅行のときもそうでした。グレンが見たという氷の結晶のような物質は、カプセルに衝突しないで、グレンによれば、窓から遠ざかりました。船体に反発したからです。

私は米国人たちと一緒にグレンが撮影したフィルムをテレビで見ました。画面の左下隅に二機の宇宙母船が写っているのが見えました。これは私が撮影した円盤写真の中に写っているのと同じ型のものです。解説者はその〝物〟について何も説明しませんでした。このことはグレンが二種類の異なる物を見たことを示しています。一つは私が〝空飛ぶ円盤同乗記〟中で述べた微小な光る物体で、宇宙空間に満ちている物です。もう一つは彼が〝ホタル火〟と言った小型円盤で、後に彼はこれを〝火の玉〟と言い直しました。そのとき巨大な母船はグレンのカプセルから数マイル彼方にいて、グレンの宇宙旅行を詳細に調べるために超小型円盤を放ったのです。つまり予期しない危険な出来事が発生した場合グレンを救出するつもりだったのです。

例の銅線は地球の宇宙科学実験にたいして妨害にはならないでしょう。銅線がきわめて小さいからです。この実験で科学者が何を発見しようとしているのかはよくわかりません。ただ、それは宇宙通信と関係があることだけははっきりしています。

しかしこれからのロケットや宇宙飛行士には別な危険があります。なぜなら現在大気圏外にはこれまでに打ち上げたロケット類の残骸が五百個以上もあるからです。それらのかけらのなかには

普通の家の室ほどの大きさのものがあったりします。なかにはまもなく落下して大気圏内で燃えるのもあるでしょうが、数百年間軌道を廻るのもあるでしょう。地球の宇宙船がこうしたかけらに衝突する危険もありますが、どうすればかけらのすべてを除去できるかについてはまだ方法が見付かっていません。われわれは自然界が有しているような磁力を持っていませんので、かけらを引き寄せる方法がないのです。しかし自然の磁力のためにこれらのかけらのなかには互いに集まって大きな塊となり、宇宙ジンを集めてそれが次第に大きくなって小惑星となるのがあるかもしれず、もし地球か月に衝突し、場合は大惨事を起こすことになります。

問　アトランティスに関する最近の諸発見について説明して下さい。

答　アトランティス人はレムリア人と同様に原子力の誤用によって自滅しました。しかしそれ以前にトリテリア人という種族がいたのです。あなたはギリシア神話に出て来る半人半魚または半人半馬の絵を見たことがあるでしょう。これはトリテリア人が諸元素の支配者であったことを象徴しています。また実際にそうでした。しかし万物は一定の周期のもとに流転します。この種族も例外ではありませんでした。地球もそのとおりで、今や自転軸に関して一定の周期を完了しようとしています。この周期が完了すると地球は〝身をくねらせて〟新しい自転軸を中心に廻転することになります。この変化はきわめて重大なものであって、最悪の地域にいる人は事前にそこを脱出して別な地域へ移動しなければなりません。トリテリア人は宇宙船を持っていたので脱出したのですが、奇妙なことに一部の人々はそうしようとしなかったのです。第二次大戦の末期に原爆が使用された当時、米国では或る地方で自然のほら穴が存在するという噂が流れて学者団がそれを探索し始めました。その探索で地滑りのあった個所を調査して、その下に固い地盤があるか、またはほら穴がありはしないかと調べてみたのです。するとこの調査中に関係者は七つのほら穴の中にそれぞれ七個の異なる古代の宇宙船を発見しました。それらは完全な状態で残っていましたが、ほら穴が発掘されて空気に触れるとまもなく崩壊してしまいました。

ケァリフォーニアの死の谷でほら穴が発見されたことがあって、そのとき高周波料理ストーヴや陶磁器が発見されましたが、それは現代のものとは完全に異なっていました。現代最高の技術者でもそれほどに優美なデザインで製作することはできないからです。またその場所で人骨も発掘されましたが、それらは身長九フィートもあって、その地域にいた古代の文明人が巨人族であったことを示しています。その陶磁器は今なお調査研究されていて、表面にあった記号類の解読が試みられていますが、終了すれば一般へ公開されるでしょう。今のところは極秘にされています。

以上のことはアトランティスやレムリアより以前にそれ以上の偉大な文明が地上に存在したことを示しています。すべての源流は理想的な種族であったトリテリア人に帰するのです。

問　なぜあなたは旅行中にいつもホテルを利用して友人の家に泊まらないのですか。

答　理由をお話しましょう。ホテルは公共の場所であって、だれでも自由に出入りできますし、訪問しようとする部屋の位置さえわかっていれば、それを探してノックして中へ入ることもできま

す。一九五九年の私の旅行中に発生したコンタクトのすべてはそうでしたし、今でもそうです。ホテルやその他の公共の場所に出入りする人にたいしてはだれも留意しません。惑星人は個人の家を信用しませんので私はいつもホテルに泊まることにしています。

問　或る農夫が畑を歩いていて突然消滅したという例を聞いたことがあります。これについては如何ですか。惑星人の仕業ですか。

答　そうです。彼らはそんなふうに人間を空中の円盤へ引っ張り上げることができるのです。私にもその体験があります。その農夫はすでに家へ帰されているでしょうが、本人もその妻も沈黙して語らないでしょう。

ときとして或る人が突然失そうして、再びこっそりと帰って来ることがあります。妻帯していたアメリカの一科学者にその例が発生しました。彼は二年後に帰って来ましたが、全く違う場所で馬丁として働いていて、自分の家族の所へ帰ろうとせず、妻や数名の人たちが本人を見付けましたが、本人は「自分は別人だ」と主張していました。

ご記憶と思いますが、例のキャンザス市事件では私も体験しました。そのとき私は空中に停止している円盤へ引っ張り上げられたのですが、まるで自分のからだの周囲に透明なカーテンかまたはプラスティックのカーテンのような物があるような気がしました。しかしそれに触れることはできないし、見えもしません。しかもエレベーターに乗ったように円盤内へ引き入れるのです。必要とあらば一千マイルの上空からでもこれができるのだそうですが、通常は二、三百フィート上空から行ないます。乗せられる人間は周囲の〝壁〟が目に見えなくても、とにかくカバンでも何でも手にかかえてプラットフォームにいるようにただジッと立っていればよいのです。これは現実の野外で行なわれるのであって、引っ張り上げられる人間が円盤へ向かって上昇するのを地上から見ることができます。逆に人間を空中から地上へ降ろすこともできますが、地面に激突することはありません。すべてがコントロールされているからです。

問　人間が殺された場合、来世で何をしに生まれかわって来ますか。

答　本人は前生でやっていた未完成の仕事を完了するために生まれかわって来ます。戦死者は大体に憎悪や恐怖の念を持って死にます。戦後見られる多くの非行少年少女は戦死者の生まれかわりなのであって、世の中のあらゆるものを憎悪したり人を殺したりしますが、これは前生でそんなふうな環境にいて悲惨な最後をとげたからです。彼らはただわけもなく他人を苦しめたいばかりに老人や女をなぐったりします。こんなのは米国ばかりでなく世界中にいます。つまり彼らは前生でそんな死に方をしたのです。これを証明するには次のように考えてごらんなさい。あなたは今夜ひどく怒るとします。夜中よく眠れないでしょう。翌朝目覚めたときもなお怒っています。これと同様に激しい怒りや憎悪の念を持って死ぬ人は、その最後の想念たる憎悪感を持ったまま死ぬのであって、次に生まれかわるときにその想念を持って生まれるのです。第二次大戦の結果、そのようにして生まれ出た青少年が世界中に存在しています。米国にも沢山いますが、白昼に街路をうろついて他人をなぐったり殺したりします。試みにそんな連中に「なぜそんなことをするのか」と尋ねてごらんなさい。「自分で

もわからない。ただやりたいからやったのだ」と答えるでしょう。また「世の中の人間が憎らしい」と言うのもいるでしょう。こうして彼らは戦争中に行なわれたあらゆる出来事を再演しています。ここにはすでに〝償いの法則〟が見られます。というのは、かつて戦時中に「若者よ、軍隊へ入って祖国を守れ」と呼びかけて多数の兵士を死地に追いやった人たちが今はその兵士たちの生まれかわりである非行青少年に悩まされ、善導策に心痛しなければならなくなったからです。

第二次大戦の結果は第一次大戦のそれよりも多くのトラブルを起こしましたが、これは第二次大戦がより以上に残酷で、より多数の人が殺され、より激しい憎悪に包まれていたからです。私は航空機研究の科学者であった一人の優秀な男を知っています。彼には妻子があり、両親もすてきな人でした。彼は海軍に勤務していました。父親は陸軍大佐でした。ところが四年ぶりに帰宅したとき本人は家族を殺してやろうという気持を起こしたのです。夜中彼はもだえ苦しんで眠れませんでした。ついに彼は私の所へ相談に来ましたので、私の助言によって心中の悪魔と闘い、やがてそれに打ち勝つことができたのでした。しかし殺したいという想念が起こったのは事実です。それがなぜだかわかりますか。彼は軍にいて、周囲の上官たちから「生きものはすべて樹木の如き単なる物体にすぎない。だから撃ち殺せ。何でもありはしない」というふうに教育されていたのです。今の非行青少年たちもかつては軍隊でこのような訓練を受けて、こうした思想を持って生まれかわっているのです。

問　それは社会が急速に変化するからではありませんか。

答　社会にはたしかに責任があります。だから社会は償いをしているのです。一人の人間を逮捕して裁判にかけ、電気イスかガスで死刑を執行するには政府にとって二十五万ドルを要します。そんな金があれば多くの有益な事業がやれるでしょう。しかるに一人の男か女をこの世から除くのにそれだけの費用をかけねばなりません。しかもそんな状態を生み出したのは社会です。

問　私は人間だけが物事を変化させることができるのだと思いますが—。

答　そうです。他の何物も変えはしません。だから人間は高度な理想主義的な思想を持ち、それを生かさねばならないのです。聖書でミカエル（注。大天使の一人）が悪魔になったとき地上に落とされたというのは面白いですね。だからこの世の人間はみなミカエルの友達なのであって、小悪魔ばかりなのです。互いに苦しめ合い、自分をも苦しめています。まあこれは冗談ですがね—。

問　しかし惑星人がわれわれのと同じような障害を持たないのはなぜですか。

答　それは彼らが互いに尊重し合い、万人を兄弟とみなしているからです。この地球ではそうではありません。地球人は所持している財産や自己の社会的地位に固執します。考えてごらんなさい。シャベルを取って地中を掘る人がいなければビルディングは建たないでしょう。地中を掘ったならばレンガ職人がやって来て土台を築き、壁を作ります。すると塗料屋が来て美しく塗装して家はできあがります。しかし最初に掘り屋が地面にミゾを掘らなかったら家はできません。だから働く人のすべてが重要な存在なのであって、人間の才能は互いに頼り合っているのです。

こんなふうに金星人は万人が価値ある存在だと考えています。ここにいるわれわれにもみな価値があるのです。ところが、かりにあなたが百万ドル持っているとすると、美しい婦人を誘ってレストランへ行き、豪華なすばらしい御馳走をおごって、相手の指にダイヤの指輪をはめてやることもできます。これはだれしも愉快でしょう。地球人が物に価値を認めるのはその程度ですが、惑星人の言う価値には大変な相違があります。

問　それは価値規準の問題ですね。

答　そうです。しかしあらゆる価値は等しいものです。リンゴの木が生える前に先ず地面が存在する必要があるからです。次にその木が生え、その後われわれはリンゴの実をもぎ取ることができるのです。人々が万人を兄弟姉妹として理解するならばこの地球はすばらしい世界です。多くの楽しい物事が生じるでしょう。しかし今は各種の宗教や政府の存在によって人間は互いを未知の人間に感じるように仕向けられています。私にはアメリカの国籍がありますが、もとはポーランドで生まれました。そこで「アダムスキーはアメリカ人だ」「いや、ポーランド人だ」と人は言ったりします。しかし私はいずれ死なねばなりません。あなたがたも死ぬし、だれもかれもがいつかは死ぬのですが、しかるに「あいつはよそ者だ。こいつはどこそこの出身だ」などと言って人間は互いにけなし合ったりします。人間はみな死ぬのですし、死という行為はみな同じです。そこに差別はありません。だから人間はみな同じものなのです。

ここで一つ面白い話をしましょう。これは真実なのです。地上のどこかで草の一かけらも生えていない場所があるとします。そして私が死ぬとします。するとあなたはその地面を六フィートばかり堀って私を埋めます。盛大な葬儀が行なわれ、聖水がかけられ、人々は手に一杯の砂を取って、横たわっている私の死体にかけます。するとその場所にいつか草が生え始めます。私の死体がよい肥料になったからです。すると牛がやって来てその草を食べるかもしれません。あなたはその牛から乳をしぼり取ってそれを飲むでしょう。するとあなたは私を飲んでいることになります。その牛が肥えてくるとあなたはそれを殺してステイクにして食べるでしょう。するとあなたは私を食べることになります。われわれの肉体は土に帰って上等な肥料になるのです。肉体についてはただそれだけのことなのですが、しかるに人間は如何に威張っていることでしょう。百万ドル持っていようがいまいが何の相違もありません。だれもみな土の中へもぐり込むだけです。しかし土中へ入るのは肉体だけであって真の私ではありません。あなたが埋めるときに見るのは私の肉体なのであって、私の真自我である〝意識〟ではありません。あなたは自動車のエンジンの中の気化された燃料や火花を見ることはできません。ただハンドルを握って運転するだけですが、シリンダーの中では爆発が起こって車は前進します。車が（肉体が）自身で走ることはできないのです。

次の話は冗談なのですがね―。ときとして私に次のように尋ねる人がいます。「アダムスキーさん。あなたが死んだときはどんなふうに埋葬してもらいたいですか？」そうですね、法律が許すならハゲタカが出る場所に死体を置いてもらい、ハゲタカに死体が食われれば、骨を残してハゲタカは飛び去りますので、私も空中を飛ぶことになります。つまり私はハゲタカになったわけです。

そして空中を飛んでいるときに、かつて私を気違いだとののしった人を発見して、その頭上に石を落としてやります。（笑声）

結局これは真実です。万事は輪のように回転するからです。何物かが他の物を食い尽くすのであって、これが行なわれなければわれわれは生きることができません。リンゴの木はリンゴを生み出し、人間がそれを食べることによってリンゴは人間になります。人間が食べる動物もまた人間になるのです。

良書紹介

◎月刊誌『天文と気象』 1部150円．送料12円
東京都新宿区牛込中町15，地人書館．振替東京1532．
素人向きの天文学研究誌であるが，毎号最新の知識を盛り込み，米ソのロケット工学の成果を詳細に写真入りで伝えていて，平易な文章により楽しく読める．

◎遠山啓著『数学入門 上・下』各150円，送料2冊で80円．
東京都千代田区神田一ツ橋二の三，岩波書店．振替東京26240．
この本はこれからの時代に活動するすべての日本人に必要な数学の知識を，日常生活の論理に定着させながら，だれにでもなじめるようにわかりやすく教えてくれる．そして会社の経営や商品の販売にはもちろん，勉学や家庭生活にも豊富な知恵とアイデアを提供する．数の概念から微積分までを説いている．

生命の科学 5

G・アダムスキー

第九課　宇宙的細胞と肉体の細胞の活動

第八課では科学者の細胞と色彩とに関する実験について述べました。今や科学者は宇宙空間に生ける細胞が存在する事実を認めています。私が言いたいのは、惑星人の見地からすれば、宇宙空間は細胞の集合体であるということです。

前述のように、人体は無数の細胞から成り立っており、各細胞は特殊な使命を持って活動していますが、それは集団的に行なわれています。しかも各細胞は人体を存在させるために各自の地理的な目的を果たしています。こうした活動のすべてはセンスマインドに依存していないことを忘れてはなりません。なぜならセンスマインドや視覚、聴覚などを生ぜしめるのは細胞であるからです。そして心がこのことに気付くとき、心は細胞から知的な指示を仰ごうとします。だから心はこの地球のみならず他の惑星などのあらゆる生命体と通信することが可能になるのです。現在科学者もこのことを認めています。

このことに関心のある人は—あなたは関心を持つべきなのですが—一九六四年六月号の〝リーダーズダイジェスト〟の一九五ページを読むとよいでしょう。この記事における科学者の次のような声明は私の初期の陳述が正しいことを裏書きしています。「これらの進行する酵素は、細胞間の空間を越えて呼びかけては知識を交換し合う他の細胞の声なのであって、そのため無数の細胞が肉体を形成するように集合し、集団化や繁殖においては調和して活動し、適宜な所を得、特殊な各部を形成するのである」

こうした特殊な原因によって、これまで不可解であったさまざまの神秘的な現象が起こっていたわけです。各種の心霊団体は、「センスマインドが細胞の持つ知識と接触するとき何が発生するか」を知ってはいません。だから心霊団体は霊媒が感受する事柄は死者から来るものと思い込んでいるのです。

私が説明し得る限りでは、秩序ある（宇宙的な）細胞はそれぞれ周囲により小さな分子群を従えた一個の送受信局を持っています。昔の学者はこのことを知らなかったため、感受するメッセージは高級霊から来るものと考えていました。しかし実際には自身の肉体内部から来る印象を感受していたのです。人間の肉体は無数の細胞から成っていますので、人体内部には無数の送受信局があるということになります。それはちょうど数百の働きバチを従えた女王バチが無数に存在するのと同じです。この送受信局は、あらゆる生命体の内部ですべての秩序ある活動を指令する秩序ある（宇宙的な）細胞です。それを名付けるということになれば、〝万物の父〟または〝至上なる英知〟と呼んでよいでしょう。

この細胞を形成する数百の働きバチ（より小さな分子）は宇宙の根源そのものであって、中心の局の指令に従っています。それゆえ、センスマインドが自らを宇宙的な秩序ある印象にゆだねるならば、センスマインドにとっては分子群（働きバチ）から印象を感受することが容易となります。このことを知らない心霊学の学者は、そうした印象類が死者の霊魂から来るものと考えていますが、いかにも霊が語るように思われるのは各細胞が独立した一個の実体であるからです。だから細胞の中心の発信局から発せられた印象が感受されると、それが高級霊から来るものとみなされてきたわけです。

ところが人体の内部には宇宙的な原理に反して働く細胞群があります。それらはセンスマインドによって創造された〝習慣細胞〟であって、自分たちの勝手な方法で自分を支配しようとしています。また羨望、嫉妬、猜疑などを起こす多数の〝外来細胞〟もいて、それらは個人が宇宙的な目的と一体化しようとするのを妨害します。これらは長いあいだこの世で支配権を与えられてきたためにきわめて強力です。この細胞群は細胞自身に役立つところのセンスマインドを持っています。しかし個人がこのことに気付いたならば、この細胞の化学成分は秩序ある宇宙への線に沿って変化し始めます。

右の外来細胞は、恐怖その他他人に対抗した場合の不快な感情などを起こした場合のセンスマインドによって培養されてきたものです。それらは人体に巣食うガン細胞と異なるものではありません。したがって嫉妬などを起こすことを専門とする外来細胞を繁殖させ続ければ、ガンと同様に増殖します。

ところで、高級霊と思われる物に夢中になって狂人のようになった霊媒がいたりすることがありますが、この高級霊なるものは霊的な指導者を求めてやまないセンスマインドによって創造された外来細胞にほかなりません。

あなたは質問するでしょう。「センスマインド（心）は物を創造することができるのか？」と。できるのです。なぜなら心とは一原因の結果であるために心も同じ可能性を持つからです。（注。心もそれ自体が因子となって何かを生じさせるの意）嫉妬、憎悪などのすべては人間の創造物です。宇宙には本来そんなものは存在しないからです。そして普通の細胞や異常な細胞のいずれも人間のあらゆる行為を記録していて、センスマインドは必要とあらば知識を求めてその記録所まで出向いたりします。ところが普通の細胞は本人に正しい知識を伝えますが、異常な細胞は過去の経験に基づいて誤った知識を与えます。両方とも増殖によって生きています。それゆえ異常な細胞は仲間を殖やそうと努力し、如何なる干渉にも立腹しますが、正常な細胞は立腹したり干渉にたいして抵抗したりしません。

異常な、すなわち悪魔的細胞をコズミックな（宇宙的秩序ある）細胞に変えるには、コズミック細胞の助けをかりてセンスマインドが化学的な変化を起こさねばなりません。しかしこれは容易なことではありません。異常な細胞は習慣によって自己の権力を失いたくないからです。それで、ときどきあなたは高い発達をとげた人と接触することが必要です。環境が人間の発達に大きな影響を及ぼすからです。このことは世の中を見ればすぐわかります。人間は環境によって支配されがちで＋

現在科学者はＤＮＡ（デオクシリボ核酸）が正常な細胞の活動を指示していることや、各細胞は決して沈黙しているのではなく、知識を伝え合っていることを知っています。

コズミック細胞は常に悪魔細胞を援助しようとしていますが、これはセンスマインドの強力な応援によってなされねばなりません。この過程はクセの悪い動物を馴らして従順にさせるのと同じです。この方法によってこそ悪い性癖が化学的変化を通じて善良さに変えられるのです。近頃の鎮静剤はこうした変化を起こさせますが、ただしその効果は一時的なものにすぎません。この効果を永続的なものにしようと思えばセンスマインドはこのような変化に服従しなければなりません。その変化の起こっているあいだは当然闘争が発生しますが、これは悪魔細胞が容易に折れ合おうとしないためです。しかし本人はこれによく耐えて、わき起こる不快さを気にしないように努力する必要があります。個人的な存在に終わらないで宇宙的な生活を続けようとするのならば、です。

これが達成できると自由というものがわかってきます。なぜなら、そのときこそ本人は自己の肉体を他人のための〝知識の伝導装置〟として使用しながら宇宙を旅することになるからです。これは現在用いられているラジオ、テレビという機械類に比較できます。センスマインドは知識の送受信機として働くからです。これがほんとうの霊的な発達なのですが、いわゆる心霊学においてはこの点がまだ理解されていません。

おわかりのように、この点の発達は全く〝あなた〟次第です。これまで何度も強調しましたように、今まであなたは自己の半身（センスマインド）でもって他の半身を探し求めながら、その半身（センスマインド）の領域内で生きていたのです。言い換えれば、意識として知られる宇宙的な部分（他の半身）を恋いこがれていたわけです。というのは、「もっと知らねばならないものがありますよ！」と肉体人間にささやくのは、その半身であるコズミック人間であるからです。人間はこの半身を見つけ出すまでは落ち着いたり満足したりできるものではありません。

聖書には次の言葉があります。「天になる如く地にもならしめ給え」これを言い換えれば「意識においてなっている如くセンスマインドにおいてもならしめ給え」ということになります。

正常な細胞のすべては、右の可能性をセンスマインドに印象づける意識として働いています。コズミック細胞は人間をエコひいきしませんので、人間が過失をおかすにしても人間に自身を貸与しています。人間はその過失というレッスンから学ぶことができ、自己の感受する印象を実行に移す正しい方法を求めることができるからです。あらゆる細胞はテレパシーとして知られる〝言語〟すなわち無言のままにやって来る〝印象〟という言語を用いています。

印象には二つの大通りがあります。一つは、この世でよく知られている、曲がった性質の心によって作られた異常な悪魔細胞から来る印象と、もう一つは、絶え間なく高揚の感じを与える宇宙的な性質を帯びた正常な細胞から来る印象です。この両方に通じるドアーは知られようとして開いています。そして両方の印象はラジオの電波と同様に全空間に満ちています。われわれはそうした印象の海の中に住んでいるわけですが、どちらを選ぶかは個人の気持次第です。もしあなたが悲惨な光景を描き出した戦争の絵

を望むならば、そのような型に自分を同調させ、そうした環境の中に生きることになりますし、また美しいメロディーに満ちた番組または親切な行為の遂行という番組を選んで、そのような環境を楽しむこともできます。前者は異常な生活であり、後者は高貴な生活です。こうした生活は生命の海の中で行なわれるということを忘れてはなりません。しかも人間にはそのいずれの環境を選ぶかの自由意志が与えられています。しかし私は世の中のあらゆる面での異常な行為を無視せよというのではありません。現世の最低の表現から最高の表現（の可能性）に至る生命を知ろうと思えば、あらゆる行為を観察する必要があるからです。そのようにすればわれわれは〝動・反動〟の法則、すなわち因果関係を観察しながら、人間のあらゆる行為の背後にひそむ因子を理解できるでしょう。しかしわれわれは必ずしも行為者になる必要はありません。だれでもボクシングの試合を見ることはできますが、みなが選手にはなれません。しかし選手の心がどのように働くかを観察することはできます。あなたがこうした観察法を身につければ、よき知識をそなえることができるようになり、自分の方へやって来る印象類の型に気付くようになります。ここにおいて知恵というものの始まりがあるのです。

イエスは牢獄へ出向いて囚人たちに話しかけましたが、彼はその環境や獄舎から放たれる印象類の影響を受けはしませんでした。

次のように説明することができます。「高い建物の上におりさえすれば、眼下で行なわれるすべての物事を観察できる。本人は混乱状態を見るけれども、それに影響されないし、その中に巻き込まれることもない」これこそあなたが自分の意識を通じてセンスマインドの状態を観察する場合になし得る事なのです。

私はこの講座の始めに、宇宙空間はコズミック細胞に満ちていると述べました。あらゆる細胞は心や万物を作り上げている意識ある実体です。現在科学者はこのことを認めていますし、宇宙飛行士は宇宙空間の生ける細胞から印象を感受するように訓練されています。これらの細胞は個人のセンスマインドの意見に自ら同調することはありません。しかしセンスマインドが宇宙的な源泉から印象を感受しない瞬間はありません。ところがセンスマインドはそれ自体の異常な状態で占められているために、宇宙的印象にたいして気付かないのです。しかし宇宙的印象は確実に存在しています。センスマインドがその印象に気付くようになる唯一の時は、自分自身にたいする関心を捨てる時です。ときとしてこれは冥想または沈思と呼ばれます。そのときこそ想念すなわち印象は急スピードでセンスマインドの前を通過するからです。

ここでもまた人間はいずれの印象を受け入れるかについて注意しなければなりません。悪魔細胞によって生み出される異常な印象類は、正常な印象と混じって通過するからです。にごった水が清れつな水と混じっているようなものです。

もしセンスマインドが個人的意見を起こさないで深い注意を払うならば、二種類の印象に分けることができます。異常な印象は個人的な色合を帯びていますが、宇宙的印象は宇宙的性質を帯びているからです。自由意志を持つセンスマインドはそのいずれか一方を選ぶことができます。宇宙飛行士はセンスマインドの希望的観測（こうあって欲しいという願い）と宇宙的真実さとのあい

だを区別するために右の事を学ぶ必要があります。

前述のように、センスマインドが宇宙の意識から印象を受けない時はありません。宇宙の意識は全知者であり創造主でありますので、それは創造物を愛しています。特に自らの（宇宙の意識の）総計を表現し得るセンスマインドにたいしてはなおさらです。そこで恩ちょうの法則が行使されて、センスマインドにそれと（宇宙の意識と）一体化するべき好機を与えています。つまりわれわれは〝生まれかわる〟ことによってこの好機が与えられているのです。（注。この場合は肉体の生まれかわりを意味するのではなく、精神的な一大転換を意味する）

次のように言う人があるかもしれません。「一定期間内に覚醒しないで死ねば本人はどうなるのか？」と。その場合は来世においてセンスマインドは元の（前生の）状態を続けますが、本人は自己の正体を見失っています。正常な細胞は他のコズミック細胞と結合し、異常な細胞は次第にコズミック細胞に吸収されます。しかし人間がひとたび自己の半身（意識）を知るならば、意のままに宇宙を見ることができます。そのとき本人は宇宙的実体となるからです。

地球や宇宙空間は宇宙的性質を帯びています。かくて人間はこの地球上に生きているあいだ何物を見ようともそれは禁じられていないのです。宇宙飛行士が印象類を感受することによく訓練されているならば、彼らが宇宙空間へ飛び出たとき、この体験を持つでしょう。彼らは生命の二つの状態の中に生きる好機を持つことになります。一つは世間という環境で教育されたセンスマインドと、他の一つは宇宙空間に生きているという意識的な知覚です。彼らは宇宙的印象を感受する機会を持つ一方、同時にそのセンスマインドは地上で何が起こっているかを思考することもできます。彼らは地上の知識と意識で感じる知識とを比較するためのすばらしい好機会を持つことになるのです。そしてその二つを融合させて一体化させることもできるのです。彼らは肉体の視覚器官で見える物と見えない物とを考えることになるからです。更に彼らは真実なる物とそうでない物とのあいだの相違を知るでしょう。宇宙にみなぎる細胞は印象という手段によって彼ら宇宙飛行士と通信します。そして宇宙飛行士が他人に話しかけようとする場合、センスマインドが知識を音声に換えるでしょう。

しかし宇宙飛行士が地上へ帰還したとき、世界中の人々は飛行士の知識を受け入れるでしょうか。このことは宇宙飛行士ならずともこの段階に達している人々が疑問視している事柄です。

もし人間が同胞を信頼せず、体験ある人が人類にたいする関心や、他人に自己の知識や体験をわかち与えようという意欲を持たなければ、一般人はその知識を得ることはできません。ましてや大衆が惑星人の知識の恩恵に浴すことはないでしょう。

〝信ずること〟は生活で最も重要な要素です。多数の人が人類の改善に関心を持っているからです。各人は他人を信ずるべきで、人間の改善に関心ある、特に宇宙的な分野に関心を持つ人々を信じなければなりません。また各人は自分の潜在能力を常に思い出させる〝意識による感じ〟に従うことを知る必要があります。これまで私は、コズミック細胞と異常な細胞とに言及し、コズミック細胞は万物の基本的な力であると述べました。それで増殖作用によってコズミック細胞は二番目の細胞を生み出しますが、これ

は元の細胞の子孫であって、元の細胞の持つ能力すべてを有しています。そこで二種類の人間が現われます。物欲（または肉欲）人間とコズミック人間の二人です。物欲人間は元のコズミック人間の子孫であるからです。ここから人間は自身の観念を拡大させ始め、そうすることによって、私が〝外来細胞〟と呼ぶ人間の創造物の中に人間は自己の正体を見失ってしまいます。

だからこそ人間は自身と創造主のあいだに分割を感じるのであって、両者は一体であるのに両者間の距離を大変なものにしています。物欲人間またはエゴとして知られるこのような結果は、外来細胞をはびこらせ、本人の肉体を不健康な不完全なものにします。こうして本人の不快な表現によって多くの種類の病気がひき起こされることは以前に述べたとおりです。だれも知っているように、人間は自分で思うとおりの者になるのです。

人間にとって最も必要なことは、今日人間が発している想念を直視して、それが宇宙の原理と如何に異なっているかを調べることです。人間が宇宙の原理を受け入れることが如何に困難であるかをわれわれは知っていますし、また人間と宇宙の原理とのあいだには大きな相違があることもわかっています。だから人間は完全さを求めようとするのです。おだやかな〝意識による感じ〟が完全さの現われとして依然として存在しているからです。人間が宇宙の原理にたいして異物となっていても、人間はどこかに完全さがあると感じています。その〝感じ〟が人間を完成の方向へ引っ張るのです。しかし最も安易な道を歩こうとしてはこの状態に達することはできないでしょう。このことは長い時代を通じて証されています。ただわずかにあちこちで少数の人が正しい道を歩んでいて、大衆の妨害に屈しないで信念をつらぬいています。

人間が自分の足を正しい道に乗せるや否や、本人の肉体細胞の化学的な構成が変化し始めます。本人が持っていた苦痛や病気などは消滅し始めます。なぜなら、本人は以前のような半身（センスマインド）のかわりに充分な生命力を応用し始めたからです。そして肉体の細胞すべてが新しい生活を開始します。そして知識のドアーはますます開き始めます。そして本人の迷いの人生で初めて創造主との親密さを感じるでしょう。

忘れてならないのは、われわれ各人は〝宇宙の意識〟の中の単一細胞であり、われわれがひとたびこの意識と一体化するや必要な知識にたいして制限はなくなるということです。これこそ惑星人が地球人に伝えようと努力している事柄です。彼らはこれを開始するのに努力しましたが、地球人はほとんどそれを受け入れてはいません。しかし決心をし、彼らが与えてくれた知識を応用すれば、われわれも彼らのあとを歩む好機を持つことになります。自分が何を望むか、また手近にある知識を如何にうまく応用するかは個人次第です。

宇宙には人間が一部分になり得ない物、人間が知ることのできない物は存在しません。

第十課では、宇宙という家の中にある物をあなたが知覚する方法を説明しようと思います。この第九課の始めに心霊学の誤りを指摘したのはそのためです。第十課では心霊に関してまだ知られていない面や、人間に関する真の意義を述べましょう。ゆえに第十課をお読みになれば、人間の各種の神秘的体験の相違点がわかるでしょう。そして心霊的なものに関係しないで自己を発達させ

る方法を会得できます。

第十課　意識による旅行

第九課では、意識によって空間を旅行し、存在する物を知る方法を説明しようと約束しました。これは今までよく知られてきた如何なる心霊的な方法をも用いるのではなく、また心霊研究界でいわれているような神秘的な指導霊に身をまかせたりするのではありません。自己の目的を果たすために他人をトリコにする権利を有している死者の霊魂や霊媒というものは存在しません。あなたが持っている唯一の権利は、創造主の似姿であるあなたの半身を認めることと、それと共に活動することにあります。

聖書には次のように述べてあります。「偽りの神を持つな」と。なぜなら、似姿というのは宇宙の意識と同一物である純粋な意識そのものであるからです。肉体とセンスマインドを創造したのはその意識です。ゆえにセンスマインドは自己が創造された目的を遂行しようとするのなら、両親（意識）を見付け出すように努力しなければなりません。これが、人間が永遠の状態にある家に帰ってそれと一体化することのできる唯一の方法です。そうすれば人間はあらゆる生命体との一体化を感じ、今持っているような〝永遠なるもの〟とのあいだの分離感はなくなるでしょう。

これまで述べましたように、宇宙には絶え間のない化学的な変化が行なわれていて、或る段階に或る本体は次の段階の本体に吸収されます。それゆえ人間は自己の個人的な本体を永遠に保とうとするのなら、本人は起こっている諸変化に絶えず自身を託さねばなりません。個人的なエゴは宇宙の形成の中で自己の占める場所を有していませんが、個々の本体は有しているからです。個々の物が秩序ある宇宙を作りあげているのです。それで個人的なエゴが自己をその個々の物によって吸収されるならば、それは一滴の水が海洋に吸収されるのと同様の状態になります。このことはときとして「己れを捨てて永遠の生命を得る」と言われています。それは海洋の水と一体化しますが、分子の構成において自己の個としての本体を保っています。はめ絵にたとえますと、個人と呼ばれる単一体は今や他人のあいだに置かれて、それが結局は絵を作りあげることになるのです。そのため本人は個人のときに感じていた分離感を起こさなくなって、絵全体の感じを持つようになりますが、個体性は依然として残っています。

個人としてのあなたは多くの体験の中の一構成単位です。あなたは各変化を次々と以前の変化に吸収させながら無数の化学的変化を経てきました。それゆえあなたの宇宙的な本体すなわち個体性は永遠に分裂しません。あなたの生命の連続した各段階は、あなたの誕生時から現在までが具体化したものでした。あなたが一肉体中にはらまれた日から今日までのあらゆる脈搏は〝宇宙の記録書〟の中に記録されています。如何なる脈搏や行為もその〝記録〟から除外されてはいません。あなたの肉体は今生において二十年ないし九十年の記録を保つでしょうが、それは永遠という流れの中では一秒の千分の一ほどの時間でもありません。しかるにあなたはこの地上の時間の毎秒を数えています。一方、毎秒刻々と何かの形態（形あるもの）が絶えず新生しているのです。そして毎秒は、あなたを現在の時点にもたらしたこれまでのあらゆる

瞬間を吸収しています。しかしセンスマインドはこんなふうに考えたりはしません。けれどもセンスマインドが意識と一体化すれば、それはこれまでの生活に起こった変化のすべてを再び見ることができるのです。しかも一瞬間たりといえども本人は自己の本体を分離させてはいません。しかしセンスマインドまたは個性は、自己が何であるかということに気付かないために何度も迷っています。個性というものは一生涯において何度も変化しますが、そのことは異なる年令時に撮影した自分の写真が現在の自分とは似ても似つかない場合があることでわかります。だがそれでもなお本人の意識は元と同じままに存続しているのです。

個性たるセンスマインドは通常「楽をしよう」という傾向を有していて、世の中の環境という型にはめられます。だから人間は他人と同じ社会環境にあってさえもその他人を別人と感じるわけです。これはエゴすなわちセンスマインドが宇宙の原理から全く遊離しているためであって、それは個人の本体（意識）とエゴ間の分離によって起こるのです。本体はセンスマインドにとって見えようが見えまいがあらゆる物を等しく認めますが、センスマインドは具体的な形象化したものでなければ認めようとはしません。しかし疑惑が起これば心も現象の背後に何かがあることに気付きます。しかし他人が自分を笑いはしないだろうかと気にするあまり、センスマインドは疑惑の解明を続けようとはしません。このことは個人の本体（意識）はセンスマインドに警告しようとするのだけれども、センスマインドは社会の常識に沿わないようになることを恐れるという事実を示しています。

真の意味における個人主義者はこの世に殆ど存在しません。ときたまそんな人が現われても本人は社会に容れられず、また異端者とみなされて難儀な目にあいます。この世界の偉大な人々は異端者であったことを歴史は示していますが、これはそうした人々が真の意味の個人主義的な人で、生まれながらに生命の深い意味を知っていたからです。

さて講座をすすめる前に、いわゆる物質世界は不可視の生命界の結果であることを読者は思い出して下さい。あなたが言葉で説明するかまたは他人の目に見えるような具体的な形にするまでは或るアイデアは周囲の人々にとっては不可視なのですが、このことは万物にあてはまります。すなわち目に見える物には必ず不可視な支持者があるのです。ごく最近科学者は不可視の空間から或る物質を取り出すことに成功しました。このため数年前よりも今日はもっと多くの元素が存在しています。また費用がかさむために大規模に生産できない貴金属がありますが、その物質も不可視の空間から取り出されました。これでもって不可視の世界から可視的な物が取り出され、再び不可視になるということがわかります。この手順は無限にくり返されてゆきます。このことは神秘的な霊術を用いないで宇宙空間を見たり旅したりしようという次に学ぶ方法（テレパシー、透視など）の土台となります。これは実際には意識という生命の大海の中にわれわれのセンスマインドを拡張することによってそれが可能になるのです。

それではセンスマインドの拡張とは何でしょう？　それには先ず知識を得ようという欲求が基礎とならねばなりません。例として一つの機械装置をあげましょう。天文学の初期の時代に宇宙空間の星々を見るために小さな機械（望遠鏡）が発明されました。

これは光点として見られる物についてもっと詳細に観察しようとする一装置を通じての一種の視覚の拡張でした。そしてその光点が固体かどうか、もしそうならばその表面に何があるかを知ろうとしました。月は地球に最も近い物体でしたから先ずそれが観察され、その表面に山や穴があることが判明しました。肉眼ではこんな物は見えませんので、これは〝機械の目〟であったと言ってよいでしょう。その〝機械の目〟が知識を拡張するのを助けたわけですが、これは全く「知りたい」という欲求があったためです。つまり人間の内部の何物かが「この地球以外に生きる場所はもっと沢山ありますよ！」と常に人間に語ってきたからです。時代が流れるにつれて種々の観測装置により遠方を見る技術が発達してきました。現在はパロマー山上の二百インチ望遠鏡が、不可視の宇宙空間に存在する未知の天体に関する知識を人間にもたらしています。これはまだ序の口にすぎません。電波望遠鏡がもっと多くの知識を伝えてくれるからです。顕微鏡についても同様のことが言えます。

人間のセンスマインドは自分自身にしか関心を起こしませんので、意識というものがなかったら右の発達は望めなかったでしょう。人間の不可視の部分であるこの意識なるものは、万物の因子をますます探索せよと人間をうながします。ところがセンスマインドは自己を〝因〟から分離させてしまったため、人間は宇宙の中では一微小物にすぎないけれども重要な存在であるということや、人間の義務は宇宙空間に存在する物について知ることであるということに気付くように、不可視な物に焦点を合わせてそれを視野に浮かび上がらせるのに観測装置が必要であったのです。そして意識は観測装置でもって宇宙を探索せよとせきたてますので人間はかつて知られなかった宇宙についての知識をますます獲得し続けています。

このことは、意識は人間のセンスマインドを指導するのに決して誤らないことを示しています。ただし意識にまかせるならばです。そうすれば印象類は何らゆがめられることなく感受されるのです。

しかし宇宙のすべてを人間に知らしめるような機械は決して出来ないでしょう。センスマインドと対になっている意識こそが宇宙に関して人間が知るための唯一の道具です。なぜなら、これまでに使用されてきた機械装置類は、結局センスマインドにたいして意識の指導を信頼させることになるからです。センスマインドは、かつて存在しないと思われた物が実在していることが判明したという過去の観測や体験を通じて学んでいます。感受される印象によって洩らされる事柄はどこかに存在するからです。それゆえセンスマインドはこれまでのように自身に頼るかわりに、すすんで意識から指導を受けねばなりません。そして意識から与えられる事柄を真実なるものとして受け入れるべきです。これこそセンスマインドがその半身を見い出して全宇宙の一部分になるための唯一の方法です。イエスは言っています。「見なくても信ずる者はさいわいである」と。肉眼は宇宙空間の遠方を見ることはできませんが、〝意識眼〟はそれができるのです。

そこでこれからは機械装置のかわりに意識を用いて、これまで見えなかった物を見るために、機械でやった事柄をセンスマインドにさせようというわけです。そしてわれわれが望遠鏡を通じて

見た物を信じたように、意識でもってこれと同じことをやる必要があります。

一度にあまり多くの物を見ようとしてはいけません。少しずつ意識の中へあなたのセンスマインドを拡張させながら、望遠鏡を使用するのと同じ方法を応用しなさい。強行しようとしてはいけません。自然のままに行なうのです。あなたが永遠の生命の海に入るならば無限の時間があるからです。事を急いで早くテレパシーの能力を開発しようとあせるよりも、ゆっくりと向上するのがはるかによいのです。忍耐をあなたの土台としてセンスマインドを次第に意識の中へ浸透させなさい。

忘れてならないのは、意識は一見奇妙と思われるような印象をセンスマインドに運ぶのであるということです。新しい物事はすべて最初は奇妙に思われます。そして、あなたのセンスマインドに何らの疑惑をも起こさせないで、やって来る印象や映像にたいして素直に聴き耳をたてたり観察したりする幼児のような状態にしておく必要があります。

また、一時に感受する印象または映像は、或る事柄のほんの一部にすぎないことを常に記憶することが肝要です。これははめ絵と同様であって、切られた個々の部分のすべてを見ることや、それらがどこにあてはまるかを知ることはできません。絵は少しずつ組み合わされねばなりませんが、これには時間を要します。その絵の空白の部分をあなたがこの世で蓄積した個人的な観念でもって満たしてはいけません。また感受する印象にたいして絶対に疑惑を起こしてはいけません。それは神を疑うのと同じことになります。そうすれば、どれがこの世の蓄積された知識で、どれが宇宙的印象なのかがわかるでしょう。地上から多くの印象が来るでしょう。センスマインドが慣れ親しんでいるこれらの地上の印象のなかには一見宇宙的性質を帯びているのもあり、それがどうにかすると感受される印象の空隙を満たしたりしますので、迷わないようにすることです。地上の体験を持っているために、こうした印象は落ち着く場所がないままに先を争って各自の場所を得ようとします。（注。何ら価値のない地上からの印象を宇宙的価値あるものと思い込んで本人がいとも容易に受け入れるの意）これは画家が黄色を用いなければならないときに赤色を使うほうがよいという印象を得るようなものです。

或る場合には印象は静かな小さな声のようにやって来ることがあります。するとあなたはだれかが自分に話しかけているのだと思うでしょうが、それはあなたの意識が言葉でもって物事を説明しているのです。またときにはどのように表現してよいかわからないような印象も来ることもあります。しかし遠方の光景を透視する場合は—特にそれがカラーであるとき—それはあなたの頭の中にあるセンスマインドのスクリーン上に意識によってピントが合わされます。これは少なくとも私の体験です。このことをよく知らないでこうした現象を〝第三の目〟とか〝千里眼〟とか称している人は、なぜ透視できるかという理由がこれでわかると思います。仏像類には前額部に宝石のはめてあるのがありますが、これは透視力を示すもので、その一点と両眼とを結べば三角形ができます。イエスはこれを「目が澄んでいれば全身も明るいだろう」と言っています。彼はこの場合〝心の新生〟を言っていますが、それは心と意識とを合体させて単一体にしようとわれわれが努力

している事柄をまさに意味します。するとその両者間の分離は解消し、そのとき人間は〝完全人〟となるのです。

あなたはセンスマインドが通常促進したがる願望的思考（注。こうあって欲しいという非現実的な欲求）や、より好みによる想像などを注意深く避けねばなりません。というのは想像は一つの印象に二種の面があるような考え方を促進するからです。空想を好む心は気まぐれなことをしたがります。たとえば二つの顔を持った人間の頭を作ったりします。（注。心に表裏があるの意）一つの顔は正面にあり、他の一つは裏面にあるのですが、〝自然〟はこんな頭を作ったりしません。私がこのように言うのは　意識を通じてやって来る印象や映像は空想ときわめて密接に結び付けられやすいからです。この点においてはセンスマインドは全くの専門家です。センスマインドは意識から行為をコピーしているからです。ニセモノが現われる前に先ずホンモノがなければなりません。空想が働く場合は特に右の二つが混同しやすいので、注意しなければならないというわけです。

真実の印象とコピー（ニセモノ）とのあいだの相違を見抜く人は多くいません。発明家や芸術家はこれに気付く方法を応用しています。だから人間のセンスマインドが不可能だと思いがちな新しい発明が可能となるのです。真実な印象は常に可能性を帯びているからです。

たとえ惑星人が地球へ来ないで、また人間は宇宙旅行ができるのだということを教えてくれなかったとしても、地球人は意識から与えられる印象類に従うことによって早晩宇宙旅行に成功するでしょう。人間のゴールはセンスマインドを意識に融合させることにあるからです。

ここにおいてあなたの推理力が必要とされます。印象類の一つの面は気まぐれな空想に従い、破壊的ですけれども、一方、他の面は探究的で建設的です。ゆえに真の評価に達するためには建設的な推論がなされねばなりません。あなたが何かについて真相を知ろうと思えば、自己の個人的意見と無関係になる必要があります。このことは日常生活において他人と共に生きたり働いたりする場合の良策です。

そこでひとつ基本的な段階から始めることにしましょう。先ずあなたのセンスマインド（心）をリラックス（ゆったり）させること。これはセンスマインドがそれ自身（センスマインド自身）にたいする関心を捨ててしまう場合にのみ達成できます。たとえば一人の少年が野球に熱中しているとします。ところが野球以外の物事を学ぼうとすれば、本人は野球にたいする関心をセンスマインドから完全に追い出して、新しい物事に全注意力を集中させねばなりません。これと同様です。

人によっては肉眼を開いたままでこれを行なうのは困難かもしれません。目に見える物に注意力を乱されるからです。ですからやって来る印象類や光景（映像）に完全な注意力を集中するには、目を閉じるのがよいでしょう。しかし最初は一時に五分間ないし十分間程度にとどめるべきです。始めから多くを得ようと思ってはいけません。

印象が容易に得られないというのでセンスマインドが失望したりするときは次のようにするとよいでしょう。

テーブルに向かって座り、その上に自分の両手を置いて、目を

を開いたまま両手をジッと見つめて手に注意力を集中します。すると、手が如何なる意義を持つか、また自分の生活で如何に貴重な物であるかということが次第にわかり始めます。手というものの重要性について充分な印象を得た後、目を閉じて、今度はどんな印象が来るか待ってごらんなさい。あなたがこれを正しく行なっていて、センスマインドが疑惑を起こしたりしなければ、あなたの両手が無数の分子で構成されていて、そのすべてが一瞬たりとも休むことなく活動している様子がわかるでしょう。そしてツメや関節などを構相している各タイプの分子に関する知識を得るようになります。更にレントゲンで透視する以上に、手の構造や、如何なる機械装置でも示し得ないほどのエネルギーの運動などを見ることができます。これは手ばかりでなく、知りたければ人体の如何なる部分にも応用できるのです。

この練習はあなたの発達において、かつてないほどの自信を起こさせるでしょう。そして自分が正しい道に沿って研究していることがわかるでしょう。なぜならあなたは肉眼で見得ない物を見たり、言葉で表現できない物を見ることになるからです。そしてセンスマインドとは独立している肉体とその機能を理解し始めるでしょう。

こうなるとあなたは望遠鏡を用いるのと同様に、意識という生命の海の中へ、万物の卵器である宇宙空間へセンスマインドを拡大することができるのです。あなたが不可視の宇宙空間に関心を持てば持つほど、ますます意識は肉眼が見ない物の印象をあなたのセンスマインドに与えることになります。あなたが空無だと思っていた宇宙空間にはあなたのセンスマインドがかつて可能だと考えていたよりもはるかに多くの活動が行なわれているのです。ですからあなたは決して体験したことのない印象や映像を感受するでしょう。そして両手について練習したのと同様に、宇宙の活動やまだ発生していない事件の〝予報〟などが来るでしょう。

あなたがどんな映像を感受するかは私には言えません。それをハッキリ言えば、あなたは自分自身の印象を得ないで、私が言う物事に執着するようになるからです。しかし、以上のテレパシー開発法をしばらく試みた後に、その結果を私宛に知らせて下されば、あなたが正しく行なっているかどうかはわかります。以上の方法を試みるのに屋外へ出て空を見上げる必要はありません。室内で練習できるからです。最初のわずかな実験でうまくゆかないからといって失望してはいけません。良き結果を得るまでには多くの習慣的な障害を除いてゆくことが必要です。

私がこれをマスターするには長い年月を必要としました。これまでに述べてきた〝意識とセンスマインド〟に関する知識を持たなかったからです。

常に銘記すべき事が一つあります。意識はすべてを包容する力であり英知であるということです。しかもそれはあらゆる生命体を生み出す妊婦であるとも言えます。センスマインドは意識の指令を遂行するために創造されています。意識は万物を知っていて、それを見ていますが、センスマインドはそうではありません。そこでセンスマインドを意識の生徒たらしめる必要があるわけです。センスマインドが、過失をおかすことがイヤになったならば意識の指導に従うことを学ばねばなりません。以上をマスターすれば宇宙空間を旅する術のよき基礎ができたことになります。

お知らせ

宇宙研究同好会（略称UD）誕生！

G・アダムスキーが他の惑星から来た人間と会見したというあの驚異的な事件の発生した日から、すでに十二年という才月が流れました。その間、終始一貫して真実を伝えようと努力してきた彼に私たちはどれほど宇宙への関心を呼び醒まされたことでしょう。

近頃有志の方々の声も高まりましたので、自己の真の向上を目指して宇宙への理解に意識を向けようとしているニューズレター誌友たちのあいだで、会合その他により相互を親密に結び、連携して宇宙の真実の姿を学ぶ同好会をGAP内に設けることになりました。目下これの発足準備中でありまして、同好の方々のご参加を大いに期待しております。参加希望ならびに各種ご提案の意志ある方は、三月中に久保田宛ハガキでお申込み下さい。折返し案内書を差し上げます。

編集後記

◎ 右の〝宇宙研究同好会〟はGAPの外部団体ではなく、内部の強力な盛り上がりが結実したもので、主として会合を通じて誌友間の親ぼくと研究を促進しようというものです。したがってこれは単なる興味本位の円盤研究グループではなく、先ず宇宙哲学の探究を主眼目とし、科学的な考察や実験と相まってテレパシーの能力や円盤の推進機関その他の未知の分野を開拓して、偉大な進化をとげた他の惑星の兄弟たちに限りなく近づこうというわけです。〝期待される人間像〟を作り上げるのにこれ以上理想的な手段はないでしょう。

◎ 巻頭のC・Aハニーの論文は彼独自の立場から書かれたもので、必ずしもアダムスキー側の意見を代表するものではありませんから、その点をご了承下さい。しかし無自覚な大衆の覚醒をうながす意味で貴重な記事といえます。

◎ ア氏の〝質疑応答〟は一九六三年五月にデンマークで行なわれたアダムスキー講演会の速記録〝ヨーロッパからの報告〟の転載で、今後も引続き連載いたします。先号で〝質疑応答〟の題字の下に一九五三年とありましたのは、六三年の誤りです。

◎ 〝生命の科学〟も大詰に近づき、次号掲載予定の第十一課及び第十二課でもって完結します。これを実生活で応用した結果の体験報告が次々寄せられていますが、何らかのすばらしい体験をお持ちの方で未報告の方はぜひ詳細をお知らせ下さい。貴重な資料として編集した上で、いずれ発表するつもりです。

◎ 住所を変更された方は早目にご一報下さい。また、頒布ニューズレター中に、印刷されてないページがあったりした場合は、ハガキでその旨ご通知下されば完全なのをお送りします。（久）

日本GAPニューズレター　1965 1月・2月号

翻訳編集発行人　久保田八郎

発行所　日本GAP
島根県益田市益田古川
振替・松江 二六三〇
（久保田八郎個人名義）

通巻第26号

昭和四十年
二月十日発行
―隔月刊―

頒価一〇〇円・送料二〇円
☆一ヵ年分送料共七〇〇円